研究ノート：『ビラヴィド』

刑部　昂

イントロダクション

トニ・モリソンの五作目の小説である『ビラヴィド』は、1987年の出版直後から、多くの批評家の注目を集めてきた。1988年にはピューリッツァー賞を受賞し、1992年には*African American Review*においてMaggie Sale、Deborah Ayer Sitter、Philip Pageなど五人がビラヴィド論を寄稿している。またモリソンがノーベル文学賞を受賞することとなる1993年には、*Modern Fiction Studies*においてモリソンの特集が組まれ、そこでもやはりビラヴィドは精力的に論じられている。あるいはまた、1997年に出版されたフェミニズムと人種、精神分析とがどのように関わりあっているのかを探求した論集*Female Subjects in Black and White*においては、ビラヴィドが「テスト・テクスト」として扱われている（Johnson 12）。

北部へ逃亡した元奴隷Margaret Garnerが主人に追われて娘を殺めるという史実をもとにしながらも、亡霊が現れ、キャラクター同士の意識が溶け合い、現実と非現実、意識と無意識、生と死といったものが混ざり合うこの小説は、多くの議論を呼んできた。本稿は、90年代までの批評と2000年代以降に現れた批評とに分けることで、『ビラヴィド』の批評史の大まかな見取り図を提示することを目標としている。もちろんそのような時代的区分が全く便宜的なものであることは言うまでもないが、2000年代の論考の多くは90年代までの論を再検討することで議論を深めているものとなっていることは事実である。

90年代までの先行研究については、大きく三つのセクションに分けて論じる。はじめに、ビラヴィドのアイデンティティの不確かさを論じる中で支配的な歴史観を修正しようと試みた論考をまとめた「ビラヴィド」、次に、テクストの口承性がフェミニスト的文脈においてどのように理解されてきたかを論じた「口承性と母娘関係」、そして最後に、『ビラヴィド』の一面的な理解の不可能性を説いた「テクストの決定不可能性」である。「ビラヴィド」においてはビラヴィドの不確かなアイデンティティの中に見出されてきた様々な過去や関係性を概観するとともに、そうした過去の追体験がアフリカン・アメリカンの人々にとって精神的な癒しを与えるというのだというレトリックが広く用いられてきた点についても確認していく。「口承性と母娘関係」ではビラヴィドの不確かさと共に見出されたテクストの口承性が、言語記号の戯れによる不確かさではな

くエディプス期以前の母娘関係が持つ自他が融合した曖昧な関係として一部の批評家たちによって理解されてきた背景を辿る。「テクストの決定不可能性」においては、ビラヴィドや口承性がもたらす不確かさを言語の比喩性の中に見出そうとする議論に焦点を当てる。ここでは、比喩性に着目した議論が、ビラヴィドのキャラクター分析やテクストの口承性をめぐる議論を包摂すると同時に、2000年代により活発になる解釈の倫理性についての議論へと接続していく過程をみていきたい。当然その中で、人種やジェンダーといった問題がどのように立ち現れてくるのかについても適宜論じていく。

2000年代の論は、テクストの他者性という観点から、いかに倫理的に読むべきかという議論が中心をしめている。そうした中で、90年代までになされてきた議論の見直しが行われている。特に問題とされるのは、テクストの決定不可能性がそもそも倫理的に全く正しいのかどうかということである。例えばNaomi Mandelは、本来語りえないものに対して何らかの意味づけや解釈を行うことであれ、あるいは語ることの不可能性を絶対化してしまうことであれ、過去のトラウマは語られないまま隠蔽されてしまうと述べて、一面的な解釈も決定不可能性に基づく解釈の多様化も、倫理的問題を等しく孕んでいることを示している。2000年代の議論は、このように、単にテクストの決定不可能性を称揚することが必ずしも倫理的ではないという袋小路の発見でもあり、どのようにして『ビラヴィド』を読むべきかという問題をより複雑なものとしている。総括では、90年代、2000年代の議論の流れをまとめたうえで、そうした『ビラヴィド』読解の困難と可能性を探りたい。

ビラヴィド

出版当初からビラヴィドの中心的なテーマとして論じられてきたのは、セサとビラヴィドとの関係性であった。そのような論の多くに共通しているのは、主人から娘を守るために自らの手で殺害するという、愛情と暴力とが分かち難く結びついたセサのトラウマ体験に着目しながら、そうした体験が語りなおされることによってアフリカン・アメリカンの人々の苦難の歴史が取り戻され、セサや共同体、あるいは読者をも含めたトラウマ治療が可能となるということを主張している点である。さらにその中で、ビラヴィドのアイデンティティが問題とされてきた。たとえばDenise Heinzeは、“*Beloved* and the Tyranny of the Double”（1993）において、ビラヴィドはセサが抑圧している子殺しの記憶を体現するセサ自身のダブルであるとともに、娘という個人を超えて黒人共同体が抱える奴隷制という過去のトラウマ体験を実体化した亡霊でもあるのだと述べて、ビラヴィドの歴史が語られるプロセスを通じて、キャラクターたちはもとより読者や作者をも巻き込んだ過去のトラウマとの和解が実現されるのだと主張している（204-10）。このような、セサと娘のアンビバレントな母子関係と黒人共同体が抱えるトラウマの治療とをバックボーンにして、多くの批評家によってさまざまな切り口からビラヴィドが何者であるのかを問う論が展開されていくこととなる。

Deborah Horvitz は、“Nameless Ghosts: Possession and Dispossession in *Beloved*”（1989）で、ビラヴィドは単にセサに殺された娘であるばかりではなく、奴隷として殺されたセサ自身の母親や、中間航路で投身自殺したセサの祖母を含めた「集合的存在」（100）でもあるのだと指摘し、ビラヴィドの複雑なアイデンティティを論じている。Horvitz によれば、このような母と娘との何世代にも渡って繰り返されてきた痛ましい死別の記憶においては、どの娘も母親に見捨てられたと感じているのであり、セサの娘であり母や祖母でもあるビラヴィドが復活することで切り離された母と娘の間の関係性は再び回復される（97）。しかし、相互に愛し合うビラヴィドとセサの関係は、次第に所有的な性格を帯びていき、かつてセサが娘に対する所有権の行使として行った殺害を問題化することになる（97）。自らを母親に捨てられた（所有の放棄）と理解しているビラヴィドは、セサを殺害行為の説明へと追い込むのだが、そのビラヴィドはセサを見捨てたとされる母親でもあることが、二人の関係性をより一層曖昧なものとしている（100）。つまり、見捨てられた娘ビラヴィドがセサを非難し、所有しようとすることは、セサを見捨てた母ビラヴィド自身を非難することでもあり、かつ母として再びセサを所有しようとすることでもあるのだ。Horvitz によれば、このようなパラドキシカルな母娘関係が描かれることで、世代間は再びつなぎ合わされ、白人たちによって苦しめられてきた黒人女性たちに癒しを与える効果があるのだという（100）。

Ashraf H. A. Rushdy は、“Daughters Signifyin(g) History”（1992）の中で『ビラヴィド』における曖昧性に注目しながら、セサとビラヴィドにセサのもう一人の娘であるデンヴァーを加えた三人の母子関係を論じている。Rushdy は、ビラヴィドがセサの罪悪感の肉体化であると同時に奴隷制の過去の象徴ともなっている一方で、デンヴァーはビラヴィドが体現する過去を抑圧してきた歴史を修正し、語りなおしていく「希望」を代表しているとして、二人の娘によって担われている記憶の抑圧と想起という二重性を指摘する（47-48）。Rushdy によると、デンヴァーがセサの代わりとなって共同体の人々にセサとビラヴィドについて語ることで、セサの記憶が個人を超えたより大きなコミュニティのトラウマとして認識されなおされ、セサが過去の記憶から救われる道が開かれていくのだという（55-61）。セサの記憶を聞き取り、人々に語りなおす役割を担っているデンヴァーに Rushdy が見出しているのは、アフリカン・アメリカンの伝統である口承性である。この口承性によって個々人が抱える過去のトラウマには、同じアフリカン・アメリカンという民族的なトラウマとしての個人を超えたより大きな枠組みが与えられ、人々に平穏がもたらされるのである（60-61）。

「セサのダブル」（Heinze）、「セサの娘、母親、祖母を含めた集合的存在」（Horvitz）、「セサの罪悪感の権化」（Rushdy）といったようにその亡霊的な側面や不確かなアイデンティティが指摘されがちなビラヴィドであるが、Elizabeth House は “Toni Morrison’s Ghost: The Beloved Who Is Not Beloved”（1990）においてそのようなビラヴィド像に疑問を呈している。House によれば、セサやデンヴァーは自らの死んだ娘・姉であると思い込んでいるだけで、実際には、ビラヴィドは奴隷船で運ばれ（ビ

ラヴィドの語りは奴隷船の中を思わせる描写がある)、白人によって監禁され(ディア・クリークという土地で監禁されていた黒人の少女が姿をくらまし家主の男が死んでいるのが見つかったということが共同体の住人スタンプ・ペイドによって語られる)、逃れた末にセサたちのもとへとたどり着いた生身の少女であるのだという(117-22)。長年監禁されてきたためまともな教育を受けられず、知的能力を欠いたビラヴィドはセサを自らの母親だと思い込み、他方セサやデンヴァーは文法的に崩れたビラヴィドの言葉を誤解し続けながらビラヴィドを娘・姉と取り違える双方の関係性を描くことで、モリソンは家族と切り離された苦悩に満ちた過去がいかに彼らの現実を捻じ曲げてしまっているのかを示しているのだと House は言う(122)。

このようにビラヴィドというキャラクターが様々な解釈を受けてきたことは、彼女の捉え難さに起因していると言えよう。こうした捉えどころのなさは、多くの批評家によってテクストの言葉の不確かさとして論じられていくことになっていく。Philip Page(“Circularity in Toni Morrison's *Beloved*” 1992)や Valerie Smith(“‘Circling the Subject’: History and Narrative in *Beloved*” 1993)による、『ビラヴィド』における円環に注目した論考は、いずれもテクストの曖昧性を示すものとなっている。しかし、これらの論において発見された口承性は、テクストの意味の多様性を示すものと理解される一方で、言語記号(エディプス化・象徴界)以前の母なる声として捉えられ、むしろ言語の戯れによる多義性を否定するものであると論じる批評家も現れてくる。次のセクションではまず、言語記号が示す多様性を転覆させるものとして口承性を捉える批評を紹介していきながら、何故そのような論が現れたのかという背景にせまっていきたい。

口承性と母娘関係

Rushdy による議論は、それまで論じられてきたビラヴィドとセサとの関係に見られる、過去のトラウマが治療されていくプロセスを、テクストにみられる口承性という切り口からより具体的に掘り下げていくものだった。テクストを書かれた文字と口承的な声とのあわいとして捉えるこうした論は、Rushdy においてもそうであるように、アフリカン・アメリカンの女性性と結び付けられることがしばしばある。Barbara Hill Rigney の “‘Breaking the Back of Words’: Language, Silence, and the Politics of Identity in *Beloved*”(1991)もまた、奴隷制によって失われたアフリカの言語や前エディプス的な母なる言語といった文字以前の言葉が響き渡る「アフリカン・アメリカン・フェミニン / フェミニスト・テクスト」として『ビラヴィド』を捉えている(138)。Rigney の主張は、“I AM BELOVED and she is mine” で始まる二つのセクションにおいて顕著であるように、『ビラヴィド』はセサやビラヴィド、デンヴァーのアイデンティティが互いに溶け合い区別できなくなっていくような、男性的な理解を排した女性的言語で書かれており、非人称的な、民族集団としての集合的アイデンティティが個人

に重きを置く西洋的なアイデンティティに基づいた白人的言語に抵抗し、転覆することに成功しているというものである（139）。Rigney はまた、セサが身を売ってビラヴィドの墓碑を石工に彫らせることや娘を殺害することで奴隷主人から娘を守ることを例に挙げて、白人的言語において不在や沈黙の比喩として示される黒人は、言語ではなく身体によっても支配的な白人的言語観に働きかけ、対抗しているのだと主張する（143）。これは、自他の区別がなくなっていく関係性の中でビラヴィドがセサを追い詰めていくのと同様に、Rigney のいう言語以前の状態というのがある種の暴力性（売春・殺害）を孕んだものでもあることを示唆するものでもあるように思われるが、Rigney は、黒人を沈黙させてきた白人中心主義的な制度そのものの暴力性を暴き、転覆するものとしてセサの売春行為や子殺しを捉えている（143）。

Rigney の論は、言語参入以前の母娘関係の中にアフリカン・アメリカンの民族性を見出すという意味で、男性性ばかりでなく白人的な認識に対立しそれらを排除するというものになっている。そしてそのことは、エディプス期以前の母娘関係や身体が抑圧的な言語記号の秩序を転覆することとつながっており、黒人女性と言語「以前」の声が密接に関わっていることを示している。しかし、エディプス期以前の母子関係にアフリカン・アメリカンのアイデンティティを見出そうとする Rigney の論の理論的支柱となっているのは、クリステヴァやシクスーといった白人フェミニストに負うところが大きいのも事実であり、その点が Jean Wyatt や Margaret Homans といった白人批評家と黒人批評家 Rigney との交点ともなっている。Jean Wyatt は “Giving Body to the Word: The Maternal Symbolic in Toni Morrison’s *Beloved*”（1993）において、セサの身体描写が一見比喩的でありながら総じてリテラルな表現となっていることを指摘して、自らの身体と子どもたちとを未だ切り離せないセサは、具体的な事物にたいして抽象的な記号を代置する象徴界への完全な参入を拒んでいるのだと述べている（476-79）。セサは象徴界と想像界とが不分明ないわば “maternal symbolic” とでもいうべき状況にあるのだ（475）。こうした自他の区別を排した前エディプス的な母娘関係に民族的全体性・統一性のノスタルジックな理想を見ていた Rigney とは異なり、Wyatt はそうした関係における母娘愛は奴隷制にも似た相互所有に基づいており、したがって暴力的でもあることを明らかにする（481-82）。Rushdy と同様に Wyatt は、このような前エディプス的な閉じた母娘関係を解体し、セサを過去のトラウマから救う契機をデンヴァーの共同体への参入に見出しながら、テクストにおける口承性と文字性の両立を指摘する。Wyatt によれば、デンヴァーはセサの娘から共同体全体の娘となることで母娘の閉鎖的な関係から抜け出し、共同体というより開放的で互恵的な関係の中で象徴界と想像界とがより健全なかたちで併存する “maternal symbolic” を可能とするのだという（482-83）。デンヴァーが再び白人の奴隷廃止論者 Lady Jones に聖書の読解を教わると同時にレーズンローフを作ってもらっていたことは、“oral”（口承的＝口の）と “verbal” 両方の快楽を示唆するものであるとともに、セサがより多くの人々とつながりあえる環境の中で自らの過去を語る主体性を獲得する可能性を開くのだ（483）。

Wyatt は文字と口承的な声とを同時に見出すことで、Rigney が称揚するエディプス期以前の状態へのノスタルジーが孕んでいる危険性をテクストが最終的に回避していることを指摘するとともに、逐語性から口承性と文字性の両立へと向かうテクストの比喩的ふくらみを見出している。Rigney や Wyatt の議論において口承性と文字とが何故そこまで問題となるのか、Margaret Homans は "'Racial Composition': Metaphor and the Body in the Writing of Race"（1997）においてその背景を説明している。1980 年代に、黒人男性批評家たちと黒人女性批評家たちとの間である「痛ましい論争」が起きた（79）。発端はアフリカン・アメリカン・フェミニストの Joyce A. Joyce による、Henry Louis Gates Jr. や Houston Baker Jr. といった男性批評家たちが主導したアフリカン・アメリカン理論へのポストモダニズムの導入に対する批判である。とりわけ Joyce が批判したのは、Gates たちの理論的支柱の一つであるラカンの言語理論であった。この理論が女性差別を構造的に孕んでいることを指摘したのである。身体的な性的・人種的差異こそがアフリカン・アメリカンの女性固有の体験の源泉であるとする Joyce にとって、言語の比喩性を称揚して人種やジェンダーを社会的構築物としてのみ捉える Gates たちは、アフリカン・アメリカンの女性のアイデンティティの根拠を消去してしまうと考えられたのだ（Homans 80-81）。他方 Gates や Baker らの主張は、人種を比喩ではなく身体的特徴として理解することは、人種差別の根拠とされてきた本質主義や生物学的知識をにおわせるという点で、白人中心主義の再生産になりかねないのだというものである（Homans 78-79）。

Homans によれば、アフリカン・アメリカン・フェミニズムが拠り所としているのもまた白人フェミニズム理論であることから、彼女たちの議論自体が、白人女性と黒人女性との関わり合いもまたアイデンティティを完全に身体的特徴に結びつけるのか、あるいは社会的に構築された文化的表現＝比喩として身体に関わらず共有可能なものとして捉えるべきであるのか、という問題を内包している（83）。したがって Gates や Joyce 等によるジェンダーについての論争は白人女性と黒人女性の間の人種的差異の問題ともつながるものなのである（83）。つまり、人種的・性的なアイデンティティを身体に見出す方法そのものがそもそも白人女性によって構築されたものであり、しかしアイデンティティを身体ではなく文化的構築物として比喩化する態度は男性中心主義的なものであるというジレンマをアフリカン・アメリカンの女性たちは抱えているということになるのだ（83）。

こうした議論を追いながら Homans はアフリカン・アメリカンの女性作家たちがどのようにして比喩（男性性）とリテラル（女性性）という図式を描いているかを、Alice Walker の *Living in the Word* や *The Temple of My Familiar*、Maya Angelou の *All God's Children Need Travelling Shoes* と共に『ビラヴィド』を取りあげて論じている。セサが奴隷主ガーナーの死後に農園スウィートホームの管理のためにやってきたスクールティーチャーとその甥たちによって背中に受けた鞭打ちの痕を、逃亡中に助けられた白人女性エイミー・デンヴァーに倣って「木」として比喩化する。これに対し

て同じくスウィートホームで奴隷だったポール・ディはセサの傷を単なる傷跡そのものとして理解する。傷跡を巡るこの二つの対比的な認識は、モリソンが傷跡の比喩化による美化を実際に起きた暴力の事実性を隠蔽するものとして認識していることを示唆している（89）。しかし同時にポール・ディの発言はセサとの不満足に終わった性交後になされることから、傷跡のリテラルな解釈はポール・ディの男性的なフラストレーションを反映しているともとれるのであり、この場面では比喩とリテラルのどちらかが一方的に正しいという書き方はなされていないのだと、Homans は述べる（89）。とはいえ、セサの母親とのつながりが思い出される場面では、モリソンは比喩的記号ではなくリテラルな身体性に軍配をあげているのだという（92-93）。セサは当初母親の胸の下にある奴隷であることを示す焼印＝記号を母親とのつながりだと誤解するのだが、セサの世話をしていたナンがアフリカの言語＝前エディプス的言語で語った、セサの母親が黒人との純血であるセサを残して白人との間に生まれた他の子どもたちを殺したという挿話が思いされる時、セサは母親との言語や記号以前のつながりを取り戻すのである（93）。セサの傷跡と自らの出生の記憶を描く中で、モリソンは比喩とリテラルとの間を往還しながら最終的にはリテラルな身体としてのアイデンティティ像を選択しているのである（93）。

Homans の議論は、テクストの比喩性と逐語性とがしばしば『ビラヴィド』批評において問題となる背景を示しているという点で意義のあるものとなっている。しかし同時に、比喩性よりも逐語性を重んじるものとして『ビラヴィド』を読解する限界もまた図らずも示しているように思われる。そのことは、Deborah Ayer Sitter による『ビラヴィド』における木のイメージの読解と Homans の読解とを並べてみるとより明らかになる。Sitter は “The Making of a Man: Dialogic Meaning in *Beloved*”（1992）において、それまで『ビラヴィド』を論じた批評が総じて母性愛や母と娘の関係性をめぐる議論ばかりであったことを指摘し、黒人男性キャラクターについても焦点を当てなければ、『ビラヴィド』に描かれているアフリカン・アメリカンという一民族の苦しみを理解することはできないのだと述べて、ポール・ディを中心とした黒人男性キャラクターの重要性を提起している（189）。

Sitter は、バフチンの言語理論を援用しながら、Homans とは反対に多様性を持った比喩的言語をアフリカン・アメリカンの言語観と結び付け、そうした多様性を抑圧し単一的・直接的な意味を押し付けるのは白人的言語観に基づいているのだと主張する（191）。Sitter は、セサが背中の傷痕を木として比喩化することについて、セサがエイミー・デンヴァーと共に自らの苦しみを比喩化したという女性的な文脈への配慮がなされなければ理解できないものだとして、ポール・ディが単なる傷として木の比喩を退けることを問題化する（195）。ポール・ディの男性性は本来同じくスウィートホームの奴隷だったシクソが体現するようなアフリカ的な多様性・寛容性を備えたものであったはずが、そうした多様性を抑圧するガーナーによって植え付けられた白人男性中心主義的な男性像によって汚染された結果、セサによる傷跡の比喩化を理解できなくなってし

まっているのである（195-98）。しかし、子どもを殺した母親という、白人男性的な理解の範疇を超えた女性像を示すセサを最終的に受け入れることで、ポール・ディは白人的な男性像を捨てて本来持っていたアフリカ的な包容力を持った男性像を取り戻すことができるのだと Sitter は結論付ける（200-1）。

Sitter による比喩的イメージを肯定的に捉える読解は、Homans の提示した文脈においては女性を不在化することによって成立する男尊女卑的な構造の反復にもなりかねないと言えよう。比喩化は心理的な治癒効果を持っているかもしれないが、それは暴力があったという歴史的事実を覆い隠し、忘却してしまう危険性があるのだという Homans の批判は、Sitter の読解におけるような比喩性の美化を無批判に受け入れることを問題化する（89）。他方 Sitter による指摘は、比喩性は実のところ女性キャラクターによっても担われており、それを逐語的に読んでいるのは男性キャラクターであることを明らかにしている。実際 Homans は、セサが傷跡を木のイメージで比喩化しているのをポール・ディが単なる傷跡として読み取る場面を取りあげて、モリソンが男性的な比喩性よりも女性的な逐語性を重視している根拠としているのだが、そうした定式化はこの場面におけるキャラクターの性別とあべこべになっているのだ。これは Homans の議論が自家撞着に陥っていることを示すと同時に、『ビラヴィド』というテクストの割り切れなさを浮き彫りにしている。

テクストの決定不可能性

逐語性から口承性と文字の併存への移行を論じた Wyatt や女性的な逐語性を男性キャラクターに見出してしまった Homans が、意識的にあるいは無意識的に、テクストそのものの決定不可能性に帰着していることは示唆的である。決定不可能性は、人種やジェンダーといった階層構造に基づいた二項対立的な枠組みそのものを問い直す働きをしている。Wyatt や Homans と同じく白人であることに加えて男性でもあることが持つ困難を吐露しながら、James Phelan は “Toward a Rhetorical Reader-Response Criticism: The Difficult, the Stubborn, and the Ending of *Beloved*”（1993）において『ビラヴィド』の決定不可能性そのものに注意を向ける。Phelan は、それまでビラヴィドというキャラクターがさまざまに解釈されてきたことについて、いずれの論も間違いとは言えないことを指摘して、一つの論に結論付けることの不可能なテクストとして『ビラヴィド』を位置づける（226-28）。Phelan は多くの論が『ビラヴィド』を説明可能なものとして解釈し、裁断していった結果、本来多層的な広がりを持った読書行為を解釈行為によって狭めてしまっていることを批判する（228-29）。Phelan は “rhetorical reader-response” という言葉を用いて、テクストを作者と読者の多様なコミュニケーションの場として捉えることで、他のより多くの読者と共有可能な読書体験を示すべきであるのだと主張する（228-29）。Phelan は、『ビラヴィド』を説明可能な部分である “the difficult” と説明不可能な “the stubborn”、設定年のズレといっ

た読むうえで大した意味を持たない “the erroneous” とに分割し、理解不可能な “the stubborn” に多様な解釈を与え続けることで、逆説的に他の読者と共通理解できる範囲を拡大するという読み方を提起する（229-31）。しかし同時に Phelan はそうした読みがテクストの我有化につながる危険性を指摘して、テクストの説明不可能性を尊重し、テクストの完全な共通理解はできないことを認めなければならないのだと述べている（231-32）。

テクストの読解を動きのない一面的、静的なものとするのではなく、時に自己矛盾に陥りながらも多様な解釈の可能性を探っていく動的なものとすべきだという Phelan の主張は、90 年代の『ビラヴィド』批評の多くに共有されているものであるが、後に述べるように 2000 年代に入ると、静的なものを排することを至上命令としてより徹底化する倫理的な要請と、そうした徹底化もまた倫理的に問題含みであるという批判とが現れることになる。しかしここでは、Phelan の示す作者と読者との間のコミュニケーションを通じた多様な解釈の可能性に注目して、そうした読み方がアフリカン・アメリカンの口承的な伝統である “call and response” として理解されてきたことを紹介したい。

『ビラヴィド』における口承性については Rushdy や Wyatt の論においてデンヴァーと共同体との関係を通して既に見たが、Maggie Sale は “Call and Response as Critical Method: African-American Oral Traditions and *Beloved*”（1992）の中で、Phelan が指摘したようなテクスト全体にわたる読者と作者を交えた読解と語りなおしの可能性を論じている。Sale は『ビラヴィド』を「オーラル・テクスト」（178）と呼んで、『ビラヴィド』は西洋的な伝統を用いることなく “call and response” や即興、観客の参加といったアフリカン・アメリカンの口承伝統の技法を駆使しているのだと指摘する。

Sale によれば、“call and response” とはある話が語り手と聞き手問わず双方から繰り返し語りなおされていくことで、同じ話でありながら様々な差異を孕んだフィクショナルなものとなっていき、最終的にどのバージョンが正しいかは双方の合意に基づいて決定される行為である（178-79）。したがって絶対的に正しい語りはなく、それまで真実として権威付けられていた語りも相対化される。こうした語り直しのプロセスの中で、過去の苦しい記憶は変化していき、ついには精神的な癒しがもたらされるという Sale の指摘は、Sitter が論じたセサの背中の傷の比喩化によるトラウマ体験の再解釈の可能性とつながるものであろう。しかし、Sale は白人によるいかなる認識も差別的であるのだと断言する（178-81, 185）。

Sale は、セサが娘を殺害した動機についても一面的な理解では解決できないものであるとして、読者は様々な角度から解釈していくことを求められているのだと指摘する（182-83）。子どもが奴隷制に引き戻されようとしている母親の心情、セサに人間性を認めないスクールティーチャーに対する反撃、子どもを所有できない奴隷ゆえの子どもに対する執着心といった、やむにやまれぬ数々の理由が考えられる（184）。し

かしそれらと共に、セサの行為を動物的なものとみなすスクールティーチャー的な解釈や哀れなヒロインとして祭り上げる奴隷廃止論者のような解釈の可能性も認めながら、『ビラヴィド』においては一見好意的に描かれているエイミー・デンヴァーを含めたあらゆる白人キャラクターの視点は総じて一面的な理解にとどまるものであり、アフリカン・アメリカンの多面的な理解の優位が示されているのだと Sale は結論付ける（185-86）。

Sale の論はアフリカン・アメリカンの認識を多様性のあるものとして評価する一方で白人的な認識を一面的かつ差別的なものとして否定的に捉えるという Sitter と同様の図式化をより徹底的に推し進めている。しかしその一方で、読者は能動的に解釈を語りなしていくべきだという Phelan の主張が、客観的な事実性に基づいた歴史観すらもフィクションの変奏として捉える可能性を持っていることを明確に指摘している点は重要に思われる。Sale と同様の議論は Yvonne Atkinson によってもなされている。Atkinson は “The Black English Oral Tradition in *Beloved*: ‘listen to the spaces’” （1998）において “Call/Response” や語り手と聞き手が相互に語り説得し合う “Signifin” といったアフリカン・アメリカンの口承伝統が「ビラヴィド」に見られることを指摘しながらも、Sale とは異なり『ビラヴィド』は支配的な文化の中にアフリカン・アメリカンの口承伝統を抱き合わせているのだとして、白人文化と黒人文化が共存していることを指摘している（247）。また Atkinson は Sale が指摘したような客観的事実をもフィクション化する話法を “Witness/Testify” と呼び、そうした話法は実際に自分が目撃した出来事でなくても語り直し、フィクショナルに目撃することができるのだと述べ、語り手と出来事との関係性が時間的・空間的に隔てられていても構築可能であることを議論している（254-55）。

Rafael Pérez-Torres は、“Knitting and Knotting the Narrative Thread: *Beloved* as Postmodern Novel” （1993）において、『ビラヴィド』ではパスティシュや言葉の戯れ、語り手の視点の揺らぎといったポストモダンの技法が用いられながらも、前近代的な口承文学の要素も組み込まれているのだとして、Atkinson と同様に西洋的な文化とアフリカン・アメリカン文化の両面があることを指摘している。Pérez-Torres はその理由としてモリソン批評でしばしば援用される Gates による議論をあげる。Gates の “Criticism in the Jungle” （1984）によれば、黒人が用いている西洋言語においては黒さが不在の隠喩として用いられてきたため、黒人が西洋言語を用いながら見出す主体性は常に不在でもあるというパラドックスを抱えており、したがって黒人作家は西洋的文学伝統と非西洋的な文学形式とを両方用いなければならない（8）。Pérez-Torres は、『ビラヴィド』で用いられている語呂合わせや比喩化といった言語の戯れというポストモダン的な技法が黒人たちによる権力への抵抗として用いられていることを指摘して、モリソンがポストモダニズムの避けてきた社会的・歴史的現実を描くことに成功しているのだと述べる。しかし、セサが娘を殺すという行為によってスクールティーチャーに抗議し、あるいは石工に売春することで「ビラヴィド」という墓碑銘を刻んで

自らの愛の深さを人々に示すことは、言語以前の身体行為による支配的言説の否認・異化とはなってもビラヴィド自身の怨念を鎮めることはできていないことを指摘して、セサが自らの過去を共同体の人々と口承文化を用いて語り合い共有することが必要なのだと Pérez-Torres は述べる（100-3）。Pérez-Torres は、Atkinson と同様にそのような口承的な語りは様々なバージョンを生み出しながら、どの語りも優劣なく描かれるのだとする一方で、本来口承伝統は「権威付けられた」バージョンを求め、「起源」となる真実を目指すものであり、断片的に様々なバージョンの語りを優劣なく生み出しているのはポストモダン的なパスティシュの技法であるのだと指摘して、口承伝統は単一的な方向性を、ポストモダンの技法は階層構造を持たない多様な方向性をそれぞれ持っているのだと論じている（104-9）。

アフリカン・アメリカンの口承伝統を「前近代」としてポストモダンと対比的に示す Pérez-Torres の論は、前者の後進性と後者の先進性とを示しかねない階層構造を孕んだものであるし（Pérez-Torres が引用している Gates はむしろその同時性を指摘している）、あるいはこうした「以前」と「以後」という枠組みは、Rigney におけるような言語以前へのノスタルジックな憧憬や、Jan Furman が “Sethe’s Rememories: The Covert Return of What is Best Forgotten”（1998）において示したような、セサは過去を過ぎ去ったこととして現在と切り離して考えることで未来へと向かっていくべきであるのだというある種楽天的な議論においても共有されている問題含みなものである。『ビラヴィド』に見られる西洋とアフリカン・アメリカンの二重性を語りの観点から指摘する Pérez-Torres は 1999 年に “Knitting and Knotting” を改稿した “Between Presence and Absence: *Beloved*, Postmodernism, and Blackness” という論文を発表しているが、これは “Knitting and Knotting” の文章の大部分をそのまま用いながら、『ビラヴィド』が歴史をイデオロギーに染め上げられた構築物＝ナラティヴとして扱っていることを示したものである。さらに、『ビラヴィド』が歴史的な事実や原初的な伝統の再構築ではなく過去に対する認識の修正を目指していることをより明確化する文章が付け足されている。しかしとりわけ意義深く思われるのは、サブタイトルが “*Beloved* as Postmodern Novel” から “*Beloved*, Postmodernism, and Blackness” へと変わり、単にポストモダン小説としてではなく黒人的な伝統を織り込んだ小説であることを強調するものとなっていることである。

Phelan の提起した “rhetorical reader-response” が Sale や Atkinson のいうアフリカン・アメリカンの口承伝統 “call and response” とほとんど対応していることや、Pérez-Torres の論じる真理を目指すものとしての口承伝統と優劣なくあらゆる語りを許容するポストモダン的なパスティシュが、Atkinson のいう科学性や客観的事実性に基づいた西洋的認識と絶えず繰り返される語りによって様々なバージョンの語りを生み出すアフリカン・アメリカンの口承伝統の反転像となっていることは、『ビラヴィド』が白人 / 黒人、西洋 / 非西洋というしばしば用いられてきた枠組みでは割り切れない曖昧さをもっていることを裏付けてもいるように思われ

る。

アフリカン・アメリカンの伝統に根ざしながら同時にポストモダン小説の白眉でもある『ビラヴィド』が孕む決定不可能性をより鮮明に示しているのは、Barbara Christian の “Beloved, She’s Ours”（1999）である。Christian は、アフリカン・アメリカンの伝統とポストモダンという背反する特徴を併せ持ったテクストである『ビラヴィド』は「自由と限界、個人的な行為体と社会、所有と過剰、存在と不在、過去と現在、生と死」といった二項対立的な枠組みを問題化しているのであり、奴隷制の過去を持つキャラクターたちが愛することもまた自由と所有という、相反する二つのものが絶えず付きまとう困難から逃れられないのだと論じている（37）。Christian によれば、奴隷にとって主体的に誰かを愛することは隷属している支配的な言説の外へと自らを解き放つ政治的で自由な行為である一方で、愛する行為はそもそも他者に対する所有という奴隷制と不可分な要素を内包しているパラドキシカルなものでもある（38）。そして『ビラヴィド』は、母性愛という原初的な愛もまた同時に政治的な構築物であること、したがって個人的な愛する自由と政治的な所有の原理が分かち難く結びついていることを、セサを通して示しているのだという（38）。セサの娘殺しや売春行為は、純粋に母親としての娘に対する所有権の行使であり、愛情表現であると理解することができる一方で、Christian はそうしたセサの強い愛情が実はセサ自身が母親からの愛情をほとんど受けなかったことに起因しているのだと述べて、セサの所有的な母性愛はセサの母親が母として子を所有できなかったことと切り離せないことを指摘する（42）。そして強い母性の表れとしてセサが自らの母乳を娘に与えるために自由を目指して逃亡するのも、娘に対する愛情が自由を目指すものであることを描いるていると同時に、自らの価値を身体部分として理解するセサの認識は奴隷の身体を部分ごとに商品化する主人の行為とも重なるのであり、やはり自由と隷属とが同様に不可分なものとして暗示されている（42）。またセサの殺害行為を含めた抑圧された過去の記憶として現れるビラヴィドは、アフリカ的な記憶であると同時に「代価」といった言葉を用いることで資本主義的な含意も示唆されているのであると Christian は述べ、奴隷制以前のものと以後のものとが別々にではなく同時に示されていることを指摘している（42）。

このような自由と所有とを基軸とした数々の矛盾が同居するテクストとして『ビラヴィド』を読んでいった後、Christian は 1993 年に自身が発表した『ビラヴィド』論 “Fixing Methodologies” の一部を二ページほどにわたって転用する（43-44）。“Fixing Methodologies” は、『ビラヴィド』が様々な切り口から読みうるテクストであることを認めたうえで、それまでの論ではほとんど指摘されてこなかった『ビラヴィド』に見られる西アフリカやカリブ海起源の思想を論じることで、アフリカン・アメリカンを民族的に団結させるテクストとして捉えなおすべきだということを主旨としていた（363-67）。しかし、“Beloved, She’s Ours” で引用されている箇所ではそうした論調の部分は省かれ、アフリカからアメリカへと奴隷を運搬した中間航路によって失われた西アフリカ起源の記憶の仕方と、それがもたらす祖先とのつながりがビラヴィドというキャラ

クターを通してどのように描かれているかを論じた部分のみが、様々な読みの一部として用いられているのであり、“Fixing Methodologies” で試みられた『ビラヴィド』をアフリカン・アメリカンの人々のためのテクストとして取り戻そうとする論法そのものを相対化するものとなっている。“Fixing Methodologies” からの引用に続く箇所では、デンヴァーが母娘関係を抜け出して共同体に出ていくことで、セサはポール・ディを含めた多くの人々と過去を共有して救われるというこれまで多くの論者によって指摘されてきたことを述べたうえで、そうした解放的な結末部の陰にはデンヴァーによる白人奴隷廃止論者のボドウィン宅での労働という事実があるのだとして、再び自由と所有との問題が露になっていることを指摘している（45-46）。

Christian の論は、『ビラヴィド』で描かれている愛に抑圧的な言説から逃れるような側面を読み込むと、同時に不自由で所有的な側面もまた浮き彫りとなるということをテクストの様々な箇所を通して示しているという点で、Phelan や Sale、Atkinson や Pérez-Torres らが提唱した、単一の解釈を与えるのではなくテクストの解決不可能性に基づいて多様な解釈を与え続けるような読み方を実践したものであると言える。“Fixing Methodologies” の文脈であれば、『ビラヴィド』はほとんどアフリカン・アメリカンの人々のためのテクスト（“a specifically African American text” [363]）であるかのように読まれていたが、“Beloved, She’s Ours” の「我々」は「彼女」ビラヴィドを含めたテクストの決定不可能性のために、アフリカン・アメリカンの人々のみを指すとは言い難い曖昧なものとなっていることは興味深い。

『ビラヴィド』を女性のテクストとして論じた Homans において女性的なもののうちに男性が見出されたように、あるいは Phelan や Pérez-Torres の読解が Sale や Atkinson と同型ないし反転像であったりするように、『ビラヴィド』に読み込まれる人種やジェンダーは、一貫したものではなく、絶えず変転していくものなのかもしれない。このことはキャラクターのレベルにおいても同様である。Pérez-Torres はスクールティーチャーについて、“Faceless, nameless, he becomes the speaking subject of slavery’s discourse. Taking advantage of his position as possessor of language, he notes with scientific detachment the animal-like characteristics of Sweet Home’s slaves”（“Knitting and Knotting” 98）と述べている。Pérez-Torres を含めて、白人男性的な認識主体は一面的で多様性を認めない静的な、それ故決定可能な存在としてしばしば批判の対象となってきたが、「個性を欠いた、匿名の」というスクールティーチャーに対する描写は、本当の名前が伏せられたまま、捉えどころない存在として描かれているビラヴィドを思わせるものでもある。実際「スクールティーチャー」は奴隷制廃止論者だったミス・ボドウィンに対しても用いられるし（314）、女性たちがビラヴィドを追い払う場面においてセサはミスター・ボドウィンとスクールティーチャーとを取り違えてアイスピックで殴り掛かる（308-9）。『ビラヴィド』においては、黒人であれ白人であれ、あるいは男性であれ女性であれ、一貫性や自律性を欠いた絶えず揺れ動く不確かな存在として描かれているのだ。

2000 年以降

Naomi Mandel は、“‘I made the ink’: Identity, Complicity, 60 Million, and More”（2002）において、Phelan らによって提唱されてきた決定不可能なテクストに対する多様な読みというのが必ずしも倫理的に正しいわけではないことを指摘している。Mandel は、『ビラヴィド』の献辞である “Sixty Million and more”（Morrison, *Beloved* v）という言葉が、ホロコーストの犠牲となったユダヤ人を指すのか、アフリカや中間航路で犠牲となった黒人たちを指すのか、あるいはアフリカや中間航路のみならず奴隷制全般の中で苦難を強いられたアフリカン・アメリカンの人々全体を指すのかが、様々な批評家のみならずモリソン自身のインタビューにおいても揺らいでいることを指摘して、そもそもこの数値が指示対象を欠いたものであり、そのことがかえってホロコーストや奴隷制が共有している歴史的事実性を超えた表象不可能な恐怖を示しているのだと述べている（581-84）。これは対象を指し示すことのできない言語の限界が逆説的に言語化し難い何ものかの存在を暗に示すことで、ホロコーストや奴隷制、中間航路といった様々な読みが可能となっているという、テクストの決定不可能性が様々な解釈の源泉となっている仕組みを的確に指摘している。

Mandel は、ビラヴィドがセサによって殺された娘の本当の名前ではないことを指摘して、娘の名前は登場人物や語り手たちによって語りえぬものとして隠されているのだと述べる（586）。そしてビラヴィドという名前はセサが石工に売春行為をしてまで彫らせた母親としての愛の印なのであり、さらに言えばセサの愛そのものというよりはセサがどのように愛していたかという「方法」をパフォーマティブに示すものであり、これにより本来語りえぬものとしてあるはずの名前は隠蔽されることになるのだという（587）。このように、語りえぬものを別のもので置き換える行為は、比喩化（Sitter）や語り直し（Sale、Atkinson、Pérez-Torres）、歴史の修正（Rushdy）、再命名（Christian）などとして様々な位相において好意的に読まれてきたものだが、Homans が比喩化による傷そのものの隠蔽を指摘したように（89）、そうした行為は語りえぬものそのものを語られないまま葬り去ってしまう危険性があるのだ。Mandel はこれを、過去のトラウマを沈黙や忘却へと追い込む支配的な言説にある意味で加担するものとして「共犯関係（“complicity”［589］）」と呼ぶ。

共謀行為は言語による隠匿だけでなく、支配的な言語から逃れるものとして Rigney や Homans らによってしばしば理想化されてきた身体においてもなされていることを Mandel は示していく。女性の身体は子どもを産むことが可能であるが故に奴隷制の再生産を行うことになり、ベイビー・サッグスが主導する身体を介したコミュニティの形成は途中で頓挫してしまい、また奴隷化された身体は再命名することはできてもそれ自体としてのアイデンティティは永遠に掻き消されてしまっているのだ（594-95）。したがって黒人たちの身体は奴隷制と切り離せないという意味で共犯関係にあるのであり、

自己や共同体は絶えず不安定なものとして立ち現れる（594-95）。

Mandel は本来語りえぬものを他のものにすり替えて語ってしまうことによる共謀関係をセサ（娘の殺害の隠蔽）とポール・ディ（ビラヴィドとの性行為の隠蔽）の読解を通して確認しながら、そうした関係から逃れるためにポール・ディは沈黙を選択する一方で、自らを娘と切り離して考えることのできないセサは娘が去った後も沈黙する行為体となれずにいるのだという（595-601）。“She left me”、“she was my best thing” というテクスト終盤のセサの言葉は（Morrison, *Beloved* 321）、“she” が娘を指すとも、あるいはセサを見捨てて逃亡を試みた末に殺害されたとされるセサ自身の母親を指すともとれると同時に、セサ自身をも含む決定不可能なものであり、セサが語りえぬものを語らずにはいられないことを示しているのである（Mandel 599-600）。このようなキャラクター間に見られる、語ろうとする力と語るまいとする力は、テクストのエピローグにおいても示されているのだと Mandel は指摘する。人々がビラヴィドのことを忘れていく過程が示されるなか繰り返される “not a story to pass on” という言葉が “It was not a story to pass on” から “This is not a story to pass on” へと言い換えられることで、ビラヴィドの話が過去から現在へ、漠然とした「それ」からより差し迫った「これ」へと変化し、テクストは “Beloved.” で終わる（Morrison, *Beloved* 323-24）。このことを Mandel は、語りえぬものを忘れようと沈黙へと向かっていく動きと、共犯関係に陥りながらも語ろうとする動きという、「二重の動き」が働いているのだと指摘する（600-1）。

Mandel は、キャラクターや語りにおいて見られるこうした語る力と語るまいとする力の拮抗は『ビラヴィド』を論じてきた多くの批評においても見受けられるものであると主張する（602, 605-6）。そうした批評の多くは、語ることの共犯性を恐れるあまり、語りえないことを倫理的な要請として強調してきたのだが、しかしそのように言語の限界を重視しすぎると、キャラクターたちが抱える、やむにやまれぬ共犯関係から目を逸らすことになりかねない（606）。Mandel は、語りえないものを説明して言語化する行為は語りえぬものそれ自体を隠匿するという問題を抱えている一方で、言語表象の限界を殊更に主張することは語られるべきもの自体を黙殺する危険性を孕んでいるのであるとして、テクストの決定不可能性を認めることで倫理性を担保しようとする批評家たちに対して警鐘を鳴らしている。

Mandel は、『ビラヴィド』を一面的に説明することでテクストを我有化してしまうという倫理的な問題を回避するために多くの批評家たちによって提唱されてきた、テクストの決定不可能性に基づいた様々な解釈の付与という方法そのものもまた倫理的に潔白であるわけではないということを「共犯関係」という言葉を用いることで指摘しているのだが、Mandel の翌年に発表された Yung-Hsing Wu による『ビラヴィド』論では、むしろその倫理的正当性が論じられている。Wu は “Doing Things with Ethics: Beloved, Sula, and the Reading of Judgement”（2003）において、『ビラヴィド』に見られる決定不可能性が倫理的な判断そのものの基準を問題化するようなジレンマへ

と読者を陥らせる、倫理と文学の交点となっているのだと主張する（782）。Wu によれば、セサによる子殺しはそもそも動機が不明な、それ故倫理的に説明不可能なものであり、これまでの批評はそのことを指摘しながらも最終的に超越的な母性愛という形で強引に説明してきたのだという（783-85）。しかし、セサの行為は既存の倫理的判断基準に収まらないために、超越的な母性愛という新たな倫理を構築するばかりではなく、むしろあらゆる判断を優劣なく並べ立てる可能性を持っているのだと Wu は述べる（795）。Hillis Miller によるカント読解を援用しながら、Wu はこうした読解可能性をパフォーマティブなものとして論じている。Miller は、カントが法とそれに隷属する主体について、主体は法に隷属するあまり法を生み出す存在となるというパラドキシカルな関係性にあることを示唆していることに触れて、そうした主体は可能性や仮説としてのみ生起するパフォーマティブな存在であるのだと論じており、Wu はテクストを読む行為もまた倫理的判断基準が宙づりにされた主体として、様々な倫理的可能性を仮説として理解し生み出していく行為であるのだと主張している（796-97）。

Wu は、そのような主体が具体的にどのようなものであるかを『スーラ』におけるスーラとその友人ネルとの対比において説明している。Wu によれば、ネルはある人物が「何であるか」によってその人の行動は倫理的に決定されると理解しているために、黒人女性であるスーラが男性のように振舞うべきではないのだと糾弾する（788）。それに対して、スーラは自らの思うままに行動しているだけでありその行動が男性的であるならば男性にもなれるのだとしてネルにおける存在と行動との関係を逆転させることで、自らの行動を規定したり絶対的な倫理的判断を下したりすることがないのだという（788-89）。スーラによる行為の重視は、規範的な倫理的制約を超え出ることであらゆるものを優劣なく判断する可能性を生み出すのだ（791）。Wu は『ビラヴィド』においても、娘を殺すという一般的な意味での母親像を超え出た行為に至ったセサに対してポール・ディが「動物」と呼ぶ場面において、ネルとスーラのような「存在」と「行為」を基にした倫理的判断の問題は示されていると指摘する（799）。Wu は、これまでなされてきた多くの『ビラヴィド』批評がテクストの決定不可能性に気づきながらも何らかの最終的な説明を下してしまっていることを批判して、『ビラヴィド』を読むうえではそのような “either/or decision”（796）を下すのではなく絶えず解釈を与え続けることがより倫理的であるのだと結論付ける（799-800）。

Wu の論は、テクストの理解不可能性を絶対視するあまり、テクストを一面的に捉えようとする立場を否定し、拒絶しているという意味で、かえって自身が批判する “either/or decision” の構造を反復してしまっているようにも思われる。Wu が理論的に援用している Miller は、“Boundaries in *Beloved*”（2007）において、Wu と同様にセサの娘殺しを既存の倫理を逸脱する行為として捉えながらも、同時に既存の倫理的範疇からセサを判断することの必要性も主張している（36-37）。Mandel の指摘した通り、一面的に解釈するのであれ、解釈不可能性を絶対化するのであれ、語りえぬものの他者性への侵害は避けられないのかもしれない。Christopher Peterson は “Beloved’s

Claim”（2006）において、奴隷制的な所有と血縁関係における所有との不可分性という Christian によって提出された問題と、テクストの理解可能性と不可能性という Wu による議論とを引き継ぎながら、テクストの他者性をいかに尊重しながらテクストを読むべきか、ということについて探求している。Peterson はセサによる娘殺害が超越的な母性愛として理解されてきたことについて、そのようにセサの行為を解決してしまうことは、テクストの他者性を抹消してしまうことであると述べる（551-54, 559）。しかし、テクストの他者性を尊重するあまり全く理解不可能なものとしてセサの行為を捉えることは、自己との関係性を失った他者は最早他者ですらなくなるというレヴィナスが陥ったような自家撞着に陥りかねないのだとして、他者性を理解可能としようとするまいと、他者に対する非暴力的な関係性は結び難いことを指摘する（550-51）。Peterson はデリダを援用して、他者の他者は自己であるということ、したがって自己もまた他者なのであり、自己と他者とは関係し続けるのだということを述べて、セサの行為を母性愛としてのみ理解することもなく、理解不可能なものとして退けることもなく読み解いていく方法を探っていく（551）。

Peterson は Wu と同様に、多くの批評家たちが超越的な母性愛を理想化することでそこに含まれる暴力性を隠蔽してきたことを指摘して、そうした論法はセサの固有性を無視してセサを利用してきた奴隷制廃止論者と本質的には変わりがないのだと述べる（553-54）。とはいえセサによる娘の殺害を全く理解不能なものとする立場もまた、そうした行為を黒人の非理性的な暴力性に還元してきた人種差別主義者たちの理解と重なる危険がある（553）。ここで Peterson が注意を向けるのは、母性愛を理想化する立場であれ、そこに人間的な母性愛を認めず本質主義的な暴力性に回収する立場であれ、母性愛自体が内包する暴力性は看過されているということだ（553-54）。Peterson は子の安全を求めるがために殺害したというセサの発言において「安全」という言葉が暴力と愛の両方を含んだ決定不可能なものとなっているのだと述べて、そもそも愛するという行為は他者を我有化しようとする暴力性を条件として可能となるものであるのだと論じる（555）。

しかし、Peterson は、母性愛の理想化による暴力性の隠匿がテクスト自体によっても周到に行われていることを指摘する。セサのモデルであるマーガレット・ガーナーが娘の殺害後の裁判で敗れて再び奴隷となったのとは反対に、セサは北部に留まっているということからもわかる通り、『ビラヴィド』においては奴隷解放論者が勝訴したという設定になっている。したがってこのテクストにおいては彼らの主張である人間的な母性愛というイデオロギーが支配的となっているのであり、母性愛そのものに含まれる暴力性は隠蔽されているのだ（552-54）。さらに、マーガレット・ガーナーに殺害された娘が「ムラート」だったのに対してセサの娘は黒人の夫ヘイルとの間に生まれた純血であることや『ビラヴィド』で語られる混血の子どもたちは母親によって殺されるかあるいはテクストに登場しないことから、セサの子どもたちが混血である可能性は周到に回避されているのであり、セサの娘殺しは一層母性愛の問題として浮き立っている

(554, 559-63)。しかし Peterson は、ベイビー・サッグスの産んだ八人の子どものうち六人は白人によるレイプで生まれたことからヘイルの純血性は明確化されておらず、したがってセサの娘にもまた混血の可能性が亡霊のように付きまとっているのだという(561-62)。セサの家系から混血の事実が抹消されていることは、白人の血が母性愛の純粋性を脅かすものであることをかえって明らかにしているのである(562)。仮に白人との混血性がセサの娘において顕在化すれば、血縁家族(父と子)と財産(主人と奴隷)との境界線はあやふやになってしまうのだ(563)。翻って言えば、混血可能性が可能性としてセサと娘との関係において常に付きまとっていることで、セサの母性愛が孕み、しかし隠匿している暴力性は明るみになることのないまま尚も離れずにいるのである。

母性愛を特権化しているかに見える、テクストに絶えず付きまとう愛と暴力とを錯乱させる混血可能性は、『ビラヴィド』というテクストを理解し、我有化しようとする際生じる暴力性と同様の問題を提示しているのだと Peterson は言う(563)。Peterson によれば、テクストの他者性への尊重は、その理解不可能性を絶対化して非暴力的な(無)関係を結ぶことではなく、最終的に理解できないことを認めながら理解することであるのだという。これはつまり、「他者との非暴力的な関係性の構築に失敗すると同時に他者を完全に我有化することにも失敗する」ことで、逆説的に「成功」する関係性なのである(563-64)。Peterson は、エピローグにおいて共同体の人々もまた、ビラヴィドを忘れることで他者性の消去を行うと同時に、ビラヴィドのことを取りこぼすことで理解不可能な他者性を残しているという点で、このような他者との関係性の構築に「成功」しているのだという(564)。

Peterson の議論は、一面的な解釈を施すのであれ、最終的な理解の不可能性を絶対視するのであれ、これまでの『ビラヴィド』批評はテクストの他者性の侵害を避けられていないのだとする Mandel が示したアポリアを引き継ぎながら、Wu のようにどちらかの方法を称揚するのではなく、むしろ双方を肯定する可能性を示唆するものとなっている。他方、Dean Franco は "What We Talk about When We Talk about Beloved" (2006)において、多くの批評家たちの方法論的支柱となってきた、それ自体語りえないはずの歴史的過去を『ビラヴィド』を介して読者が追体験し、語り直すという歴史修正主義的な読み方自体の再検討を促している。Franco は、歴史修正主義的な読解が、過去の現前を体験することを通して、喪の作業や文化的治療、あるいは死者の再埋葬や黒人女性の主体性の改善のために用いられてきたことを挙げて、そうした批評が読者をキャラクターと同一化することで達成されるとうたう現実における倫理的、政治的目標はしばしば言葉のあやに留まるものであることを指摘する(415-17)。例えば「架け橋となる文学」という言葉は架け橋を具現化するのではなく単なる比喩に過ぎないのであり、パフォーマティブ理論を用いた精神分析学的批評は概して物質主義的な側面を見落としているのである(416)。Franco は、こうした文化的治療を目論む批評は、読者を癒すことを目指しても実際に苦しんだ歴史上の人々は置き去りにしており、またいかに

してテクストが本の外の現実世界で読者に何かを行うべく働きかけるかという問題を無視してきたのだと批判する（418）。この問題は、Mandel が提示した語りえぬものの隠蔽行為と通じるものである。

Franco は『ビラヴィド』で用いられている “claim” という語の多様な意味に注目しながら、Peterson と同様に母性愛の血縁的な所有と奴隷化する所有とが切り離せないことを指摘しつつも、母性愛に隠蔽された暴力性を論じる Peterson とは異なり、所有が持つそうした曖昧性こそが、精神分析批評が目指してきた人間性の回復とそれらが見逃してきた物質性との結節点となるのだと主張する（422-25）。Franco は、奴隷制において黒人たちも所有関係を違法な形で築いていたこと、解放後にそうした所有権は目撃証言によって保証されたことを指摘して、そもそも法律上は持っていなかったものへの補償が達成されていた事実を示す（423-25）。Franco によれば、こうした目撃証言による物理的な人やものに対する所有権の主張は、「それがあったところに自己はある」というフロイトやラカンによるトラウマ理論と同様のパフォーマティブな過去との関係性を開くという意味で、所有が物質主義と精神分析との交点となっていることを示しているのである（425）。過去との心理的な関係しか築きえない精神分析的なアプローチがトラウマ体験の “mute witnesses”（427）にしかなりえないのに対して、奴隷制によって失われたものに対する所有権の主張は、物質的なレベルで過去と現在とを関係づけることができるのだ。

Franco は、奴隷制やジム・クロウ、社会的な周縁化といったアフリカン・アメリカンの人々が歴史的に抱える体験に対する精神的な癒しや喪と共に物理的な補償がいかに可能となるかを問い、“reparation” という言葉を提起する（427-28）。金銭的・物質的な補償や精神的な治療、政治的な賠償といった物質的・精神的両面の補償を併せ持つ “reparation” によって、より包括的な倫理的正義を考えることができるのだと Franco は主張する（428）。Franco によれば、もちろんこうした精神的・物質的な補償は、奴隷制によって失われたものを完全に補償するものではないが、『ビラヴィド』というテクストを介して、読者は何が取り戻せて何が取り戻せないのかを考えていくことができるのだという（432）。

過去そのものの語りえなさについて、Peterson は語ることの失敗そのものに意義を見出しているのに対して、Franco はむしろそうした恣意的な語り直しによる精神的な癒しを求めるのではなく、補償というより現実的で物質的な手段を通して今日まで続く奴隷制問題に区切りをつけることを主張している。しかし、Franco 自身が認めているように、奴隷制がもたらした損害補償は、失われたもの自体を取り戻すのではなく、それに代わる別のものがあてがわれるのであり（432）、その意味で精神分析的な批評におけるのと同様に過去そのものは隠蔽されたままとなる。精神分析的な諸批評が過去そのものを無視するものであるとして批判する Franco もまた、結局のところ同じ過ちを犯しているのだと言えよう。

Claudine Raynaud は、Franco とは対照的に、精神分析学的な批評の中に物質的な

記憶も織り込まれていることを “*Beloved* or the Shifting Shapes of Memory”（2007）において論じている。『ビラヴィド』のテクストを無意識として捉える Raynaud は、読者が直面し体験する過去のトラウマを、過去そのものというよりは、夢のように変化していくものとして読み解いている。そして、そのように変移して描かれる記憶が示す歴史が、歴史的事実を無視した全くの想像であるわけではないことを Raynaud は示している。例えばモリソンは奴隷制の歴史的な現実を示すような釘、足枷、鞭といったイメージを用いながら、そうしたイメージが持つ物理的、精神的な文脈を想像することで、過去の現実をフィクショナルな記憶として描いている（47）。これは、フィクショナルなテクストの世界と現実世界とを切り離されたものとして捉える Franco とは異なり、むしろフィクションと現実とのより複雑な関係性を示唆するものであろう。セサがウェディングドレスを作るために主人の家から布の切れ端を集めてくることに主人は気づかないように、支配的な言説では「不可視」であるだけで決して無ではない「現実」をモリソンは描いているのだ（47）。

他方で Stephen Best は、“On Failing to Make the Past Present”（2012）において、過去の回復や補償を目指してきた多くの『ビラヴィド』批評のみならず、『ビラヴィド』そのものもまた過去自体の絶対的な他者性を無視しているのだと指摘する。Best は、1980 年代後半からアフリカン・アメリカン研究で広く用いられるようになった歴史修正主義において中心的な役割を担ったテクストとして『ビラヴィド』を位置づける（456-59）。Best は、奴隷たちの隠された歴史の「目撃者」（464）となって現代において政治的に利用することを目的とするこうした潮流は、現代と区別されるべき歴史的な過去というのが本来それ自体として語りえないということを見落としているのだと批判する（453-56）。

Best による歴史修正主義批判は、『ビラヴィド』批評においてしばしば見受けられる現在の読者が過去の出来事の客観的な目撃者となるという想像力に対して注意を促すものとなっている。例えば Sandy Alexandre の “From the Same Tree: Gender and Iconography in Representations of Violence in *Beloved*”（2011）は、『ビラヴィド』に描かれる木のイメージを介して、読者は男性奴隷たちのリンチのみならず女性奴隷たちが受けてきたレイプを視覚的に目撃することができるのだと論じているが（921-23）、こうした視覚性を特権化する想像力は、過去がそもそもそれ自体として語ることも見ることもできないということへの考慮に欠けていると言えよう。しかし、過去の他者性を絶対視し、現代とは無関係であると断言する Best の議論は（455）、Mandel が指摘したようにむしろ過去そのものを隠蔽するものであり、あるいは自己と関りを持たない他者は最早他者ではないという Peterson の議論からすれば過去の他者性自体を消去しかねないものである。

過去そのものの語りえなさという観点から考えると、Franco や Best による精神分析学的な批評への批判は、過去を語ることも語らないことも同様に過去の他者性を侵害するものであるという Mandel や Peterson によって提出された問題を超え出るも

のではないと言えよう。それどころか、『ビラヴィド』を歴史修正主義の書としてのみ捉えるBestの論は、Alexandreの論がそうであるように、『ビラヴィド』を一面的に捉える90年代に流行し、その後批判の対象となってきた歴史修正主義そのものを反復することになりかねない。近年なされている議論の中には、このように90年代の議論の変奏となっているものが散見される。Sheldon George（“Approaching the *Thing* of Slavery: A Lacanian Analysis of Toni Morrison’s *Beloved*” 2012）によるラカニアン的な読みは、セサの歴史観を閉塞的なものとして批判し、それをデンヴァーが打ち破るのだという、やはりラカンを援用したWyattの論と同じ軌道を描いている。またRobert Yeatesによる“‘The Unshriven Dead, Zombies on the Loose’: African and Caribbean Religious Heritage in Toni Morrison’s *Beloved*”（2015）は、これまで看過されてきた『ビラヴィド』におけるカリブ文化を読み解きながらアフリカン・アメリカンや西洋的な文化との関係性を示すことで、単一の文化に焦点を当てた方法論では理解できないテクストとして『ビラヴィド』を位置づけているのだが、これは『ビラヴィド』におけるカリブ文化を先駆的に論じたChristianによる“Fixing Methodologies”の批判的反復になっているとも言える。こうした過去の批評の批判的な変奏自体に意義深い点もあることは事実であるが、今後は歴史修正主義的な読みとテクストの決定不可能性に基づいた読みとが、いずれも問題含みであるがために肯定されるという、MandelやPetersonによって示された状況を探求する論が現れることが期待される。

総括

『ビラヴィド』についての論考は、その出版以来数多く書かれてきた。本稿で取り上げることができたのは、そのごく一部に過ぎない。とは言え、各年代の潮流を大まかながら素描する中で、筆者はそうした潮流の変遷の中で絶えずある一語が寄り添ってきたということに思い当たった。“Missing”というその語は、実際に論者によって用いられることもあれば、用いられない場合も当然あるのだが、『ビラヴィド』批評の多様さはこの言葉の変奏として理解されうるように思われる。

モリソンは、“Memory, Creation, and Writing”（1984）において、「過去の有用なものと切り捨てられるべきものとを目撃し、見定める」ものとして自身の作品を語っている（“[Her novels] bear witness and identify that which is useful from the past and that which ought to be discarded” [389]）。こうした発言は、Bestが指摘したように、これまで描かれてこなかった過去の歴史を読者が目撃することで現代社会において政治的に流用しようという、『ビラヴィド』批評においてとりわけ顕著な歴史修正主義を促してきた。例えばRushdyは、モリソンによるこの発言を引用しながら、モリソンのテクストが「侮辱的なイデオロギーによって構築された過去の部分を避けながら、過去を現代政治に受け入れられるように」描いているのだと述べて、「現代にも有

用な過去を再構築している」のだと説明している（38）。90 年代までの『ビラヴィド』批評の多くは、この小説の読解を通して読者がこれまで看過されてきた奴隷制の記憶の目撃者となることで、アフリカン・アメリカンが抱えている民族的なトラウマを治療し抑圧的な歴史を修正することが可能となるということが論の主軸となっていた。こうした「失われたもの」や「看過されてきたもの」としての過去の歴史を取り戻そうとする動きには、“missing” の「～の不在を寂しく思う」という意味が鳴り響いている。

続いて議論の対象となっていくのは、そもそも不在であり、不可視である過去の記憶を取り戻すことが本当に可能であるのかという問題であり、ここで “missing” の新たな意味「～を捉え損なう」「取り違える」が付け加わることになる。『ビラヴィド』の読解を通して失われた記憶を取り戻す試みの中では、奴隷制の苦悩、中間航路で絶たれた命、解放後も続く暴圧、その中で分断されてきた母娘を中心とした家族関係などが、ビラヴィドを中心としたキャラクターを通して読み込まれてきた。そうした読解が多岐にわたったのはビラヴィドやテクスト全体の捉え難さのためであり、やがてそうした不確かさはテクストに描かれる言語化し難い記憶と結び付けられて、口承性と文字記号との関わり合いという問題が見出されていった。そしてこの口承性の中に、女性性やアフリカン・アメリカンの伝統を見出す論が発表されていったが、そうした論の多くは文字に支配的な言説を、口承性にそうした言説からの逸脱を読み込むことで、白人的・男性的なものと黒人的・女性的なものとの関わり合いを言語のレベルにおいてより一層問題化したのだった。このような流れの中で、人種やジェンダーを一貫したものとして読み込むことの限界から、テクストの決定不可能性を指摘する論文が現れ始めた。そして、一面的な解釈を施すのではなくそれをはぐらかすような別の解釈を行っていくことで、より多面的にテクストを読み解いていくことが提唱されるに至った。1999 年に発表された Christian の “Beloved, She’s Ours” はある解釈を行うやすぐさまその解釈の誤りを別の解釈可能性によって示していくという読みを展開した良い例であると言える。

歴史修正主義は、『ビラヴィド』に描かれている既存の歴史観では抑圧されてきた過去の記憶を現代に呼び戻そうとするものであった一方、テクストの決定不可能性に基づいた議論では、歴史修正主義におけるようなテクストの説明化では取りこぼされる解釈の可能性を多様な読みの集積によって拾い上げていくことが旗印とされた。2000 年代に入ると、90 年代になされたこれらの批評に対する倫理的な再考がなされていくこととなる。Wu は、『ビラヴィド』をある一つの切り口から説明してしまう読み方よりも、最終的な結論を下すことなくテクストを様々に読み込む方が、より倫理的であるのだとした。他方 Mandel は、決定不可能性を重視し過ぎることは語られるべき過去を隠蔽することになり、また何らかの解釈に押し込めることは、本来語りえないものを別のものに置き換えることになり、いずれにしても語りえないものの隠匿に関与することになるという批評家の二重に縛られた状況を指摘した。Mandel によるこの指摘は、90 年代に広く認められた二つの潮流である、過去の一側面を現代に蘇らせるアプローチと多様な誤読を積み重ねていくアプローチとが、いずれも過去そのものを取りこぼすという意

味で同質であることを示している。何らかの「不在に気づいて」それを取り戻そうとする試みにおいても、そうした試みそのものが「取りこぼす」ものを拾い上げていく方法においても、過去そのものは「抜け落ちている」のであり、『ビラヴィド』批評における “missing” はより重層的に響き渡るに至ったと言えよう。

実際に Peterson は、テクストを完全に理解することも全く理解不可能なものとして退けることもなく読むにはどうすればよいかという、Mandel が提出したのと同様のアポリアを「失敗」（“failure” ［564］）という “missing” と響きあう言葉を用いて探求している。Peterson は、他者であるテクストとの非暴力的な関係性（理解不可能性の絶対化）を構築することに失敗するとともに、テクストを完全に理解可能なものとして我有化すること（暴力的な関係）にも失敗することによって、逆説的にテクストの他者性は尊重されるのだという。これは、一面的な説明に終わってしまっている論であれ、あるいは理解不可能性を絶対視する論であれ、テクストの我有化あるいは絶対的な他者化にはそれぞれ失敗しているのであり、したがってある意味でテクストの倫理的読解に成功していることを示している。あるいはこう言ってよければ、Peterson の指摘は、あらゆる論は何らかの意味でテクストの他者性に対する尊重に失敗しているのでありそれ故優劣なく理解されるべきだという可能性すら開くものであろう。例えば、「全く的外れ」（Holloway 68）な論としてしばしば指摘される Stanley Crouch による『ビラヴィド』批判は（Crouch は『ビラヴィド』が奴隷制の被害をナチスによるホロコーストと競争させることを意図していると断罪している［67］）、正しく核心を見落としているために、失敗した読みの繰り返しを提唱することでテクストの他者性を絶対化しようとする議論と同様に「成功」しているということになるのだ。

Peterson の論が示唆する、あらゆる読みは失敗であるが故に成功でもあるという可能性は、『ビラヴィド』というテクストを読む行為をより一層困難なものとした。Best は、『ビラヴィド』そのものが抑圧されてきた過去を現在に呼び戻そうとする歴史修正主義的な意図をもって描かれているとして、過去そのものを十全に回復することは「失敗」を避けられないのだと批判した。しかし、Best の指摘は、90 年代の一潮流であった歴史修正主義批判にはなっても、『ビラヴィド』が過去自体を語り直す不可能性こそを論の駆動力としたテクストの決定不可能性に基づいた議論の批判とはなりえていない。むしろ『ビラヴィド』そのものを歴史修正主義的なものとして読み込もうとする Best の姿勢は、これまで問題とされてきた、『ビラヴィド』を一面的に解釈してしまう歴史修正主義の二の舞に陥りかねないものである。他方 Best と同時期に出た Sandy Alexandre による議論は、セサの背中の傷を通して、読者はそれまで表立って描かれることのなかった奴隷制における黒人女性たちに対する暴力を目の当たりにするのだというやはり 90 年代に流行した歴史修正主義を繰り返している。

こうした状況は、歴史修正主義、テクストの決定不可能性、そして Mandel や Peterson による両者は異なると同時に同一であるという議論を経て、再び歴史修正主義が反復されていることを示唆している。これは、あたかも「過去の目撃者となり現代

に反映させる」というモリソン自身が提示した一見歴史修正主義的な方法論に、『ビラヴィド』批評が閉じ込められているかのようでもある。

とはいえ、これまでの『ビラヴィド』批評において、その意味の層の違いこそあれ“missing”という一語（「捉え損なう」、「気づかずに見落とす」、「間違える」、「何かをやり損なう」、「何かの不在に気づく」、「何かを懐かしく思う」）が常に中心的な問題として扱われてきたことは、ここまで見てきたとおりである。最後に、モリソン自身のテクストに立ち返り、『ビラヴィド』における過去の記憶の描かれ方に焦点をあてながら、この“missing”に関わる問題がどのように描かれてきたのか改めて問うことで、Mandel や Peterson によって指摘されてきたような、あらゆる語りを「隠蔽」や「失敗」として捉えるのとは異なる態度を示して、本稿を締めくくりたい。

モリソンが自らのテクストについて、「過去の有用なものと捨て去られるべきものとを目撃し、見定める」（“[Her novels] bear witness and identify that which is useful from the past and that which ought to be discarded”）ものとして定義したことは、“miss”することがいかにモリソンのテクストにおいて機能しているかを暗に示している（“Memory, Creation, and Writing” 389）。暗に示しているというのは、この発言においては“missing”という言葉自体が「言い落されている」からである。この発言を文字通りとれば、Best や Rushdie などが指摘するように、モリソンは読者が隠されてきた過去そのものを目撃し現実において活かすことを提唱していることになる。こうした読み自体は間違いではないし、そこには既に「～の不在を思う」という“missing”の一語が木霊している。しかし同時に、テクストの決定不可能性についての議論や 2000 年代以降の多くの論が示したように、歴史修正主義的な過去の目撃は、実のところ過去そのものを捉えることはできていないという観点からすれば、そうした目撃者は「間違えている」のであり、過去自体には「存在していない」のであるとも言える。すなわちモリソンが“bear witness”というとき、そこには“missing”の一語が抜け落ちているのである。

実際、『ビラヴィド』に「目撃者」が描かれる時、そこには“missing”という言葉が横溢している。セサがスクールティーチャーたちに納屋で襲われた体験をポール・ディに明かし、ポール・ディが顔中にバターを塗ったヘイルについて語るとき、二人はそれまで気づかれなかった目撃者を、納屋の場面に見出す。この場面をもってして、それまで不可視だったヘイルの歴史が明るみになるのだということもできるだろう。しかしその目撃者を実際に見たものはいないし、そもそもヘイル自身が行方不明のままである。さらに言えば、ヘイルを見出すセサは、鞭打たれているセサではなく、ましてポール・ディはそこにいなかったはずである。語りによって紡がれたこの空間は、Atkinson が“witness”という語を用いて論じたような、フィクショナルなものでもあるのだ。そこではいるはずのない人物たちが、やはりいるはずのない人物たちを眺めている。そこにいるはずのスクールティーチャーやその甥たちがセサを牛のように襲っている情景（“they [schoolteacher and his nephews] handled me like I was the cow, no,

the goat" [237]）を眺めるポール・ディはそこに居合わせていないはずだが、ポール・ディを含むスウィートホームの男たちがセサをレイプすることを夢見て牛を犯した場面（"All in their twenties, minus women, fucking cows, dreaming of rape" [13]）を読者が思い出すとき、全く異なる二つの場面は溶解していく。そこにいるはずのない人物たちが、暗闇の中で溶け合い、戯れあうこの場面は "missing" の本領を示していると言える。そこは最早どこでもない場所であり、いるはずのない目撃者たちが時に思い出し、見逃し、取り違え、生み出され、いなくなるのである。

テクストに響き渡る "missing" の重複性は、しかし、見落とされることもまた可能である。とは言え「見落とす」ことすらも "missing" の変奏であるというということは、一面的な読み方そのものの中に既に多様な "missing" の可能性が木霊しているのだとも言える。そうした姿勢は、したがって、看過されてきた過去の歴史を取り戻そうとする歴史修正主義的な立場と差異を持った同一性として理解されることになる。他方、何らかの「不在に気づく」ことで既存の歴史を問いただそうとする試みは、それ自体がまた別のものを「取りこぼしている」ということが、テクストの決定不可能性の発見によって指摘されてきた。つまりテクストの決定不可能性に基づいた議論が見出したものは、テクストそのものが「捉え難い」ということであった。Mandel や Peterson による、歴史修正主義とテクストの決定不可能性とをつなげる議論の要となっているのは、両者が歴史そのものを捉えることに結局のところ「失敗している」という点であることは、これら二つの議論の中に "missing" が共有されていることを示すものである。これらすべての立場には常に一つならざるいくつもの "missing" の可能性がつきまとっているのであり、筆者が提示する新たな読みとは、こうした "missing" の変転を追いかけることに他ならない。モリソンのテクストには、"missing" という語が警告音のように間欠的に鳴り響いているのだ。記憶の起源となるべき過去が失われているためにあらゆる語りは「間違い」になってしまうといった、客観的な真偽に基づいた後ろめたさを抱え込むのではなく、過去それ自体が "missing" しているのだと捉え返すことで、『ビラヴィド』というテクストをより良く演奏することが可能となるのではないだろうか。

Works Cited

Abel, Elizabeth, et al. *Female Subjects in Black and White: Race, Psychoanalysis, Feminism*. U of California P, 1997.

Alexandre, Sandy. "From the Same Tree: Gender and Iconography in Representations of Violence in *Beloved*." *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, vol. 36, no. 4, 2011, pp. 915-40. *MLA International Bibliography*, doi:10.1086/658505.

Andrews, William L., and Nellie Y. McKay, editors. *Toni Morrison's* Beloved*: A Casebook*. Oxford UP, 1999.

Atkinson, Yvonne. "The Black English Oral Tradition in *Beloved*: 'listen to the

spaces.'" Solomon, pp. 247-60.

Best, Stephen. "On Failing to Make the Past Present." *Modern Language Quarterly: A Journal of Literary History*, vol. 73, no. 3, 2012, pp. 453-74. *MLA International Bibliography*, doi:10.1215/00267929-1631478.

Christian, Barbara. "Beloved, She's Ours." *Narrative*, vol. 5, no. 1, 1997, pp. 36-49. JSTOR, www.jstor.org/stable/20107099.

---. "Fixing Methodologies: Beloved." Abel, et al., pp. 363-70.

Crouch, Stanley. "Aunt Medea." Solomon, pp. 64-71.

Franco, Dean J. "What We Talk about When We Talk about Beloved." *MFS: Modern Fiction Studies*, vol. 52, no. 2, Summer 2006, pp. 415-39. *MLA International Bibliography*, doi:10.1353/mfs.2006.0045.

Furman, Jan. "Sethe's Re-memories: The Covert Return of What Is Best Forgotten." Solomon, pp. 26-71.

Gates, Henry Louis, Jr. "Criticism in the Jungle." *Black Literature and Literary Theory*, edited by Henry Louis Gates, Jr. Routledge, 1984, pp. 1-24.

George, Sheldon. "Approaching the *Thing* of Slavery: A Lacanian Analysis of Toni Morrison's Beloved." *African American Review*, vol. 45, no. 1-2, 2012, pp. 115-30. JSTOR, www.jstor.org/stable/23783440

Heinze, Denise. "Beloved and the Tyranny of the Double." Solomon, pp. 205-10.

Holloway, Karla F. C. "Beloved: A Spiritual." Andrews and McKay, pp. 67-78.

Homans, Margaret. "'Racial Composition': Metaphor and the Body in the Writing of Race." Abel, et al., pp. 77-101.

Horvitz, Deborah. "Nameless Ghosts: Possession and Dispossession in Beloved." Solomon, pp. 93-103.

House, Elizabeth B. "Toni Morrison's Ghost: The Beloved Who Is Not Beloved." Solomon, pp. 117-24.

Johnson, Barbara. *The Feminist Difference*. Harvard UP, 1998.

Mandel, Naomi. "'I made the ink': Identity, Complicity, 60 Million, and More." *MFS: Modern Fiction Studies*, vol. 48, no. 3, Fall 2002, pp. 581-613. *MLA International Bibliography*, doi: 10.1353/mfs.2002.0062.

Miller, J. Hillis. "Boundaries in *Beloved*." *Symplokē: A Journal for the Intermingling of Literary, Cultural and Theoretical Scholarship*, vol. 15, no. 1-2, 2007, pp. 24-39. *MLA International Bibliography*, doi: 10.1353/sym.0.0024.

Morrison, Toni. *Beloved*. 1987. London: Vintage, 2010.

---. "Memory, Creation, and Writing." *Thought: A Review of Culture and Idea*, vol. 59, no. 235, Dec. 1984, pp. 385-90.

Page, Philip. "Circularity in Toni Morrison's *Beloved*." *African American Review*, vol. 26, no. 1, Spring 1992, pp. 31-39. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/3042074.

Pérez-Torres, Rafael. "Between Presence and Absence: *Beloved*, Postmodernism, and Blackness." Andrews and McKay, pp. 179-201.

---. "Knitting and Knotting the Narrative Thread: *Beloved* as Postmodern Novel."

Nancy J. Peterson, pp. 91-109.

Peterson, Christopher. "Beloved's Claim." *MFS: Modern Fiction Studies*, vol. 52, no. 3, 2006, pp. 548-69. *MLA International Bibliography*, doi: 10.1353/mfs.2006.0072

Peterson, Nancy J., editor. *Toni Morrison: Critical and Theoreaical Approaches*. Johns Hopkins UP, 1997.

Phelan, James. "Toward a Rhetorical Reader-Response Criticism: The Difficult, the Stubborn, and the Ending of *Beloved*." Nancy J. Peterson, pp. 225-44.

Raynaud, Claudine. "*Beloved* or the Shifting Shapes of Memory." *The Cambridge Companion to Toni Morrison*, edited by Justine Tally, Cambridge UP, 2007, pp. 43-58.

Rigney, Barbara Hill. "'Breaking the Back of Words': Language, Silence, and the Politics of Identity in *Beloved*." Solomon, pp. 138-47.

Rushdy, Ashraf H. A. "Daughters Signifyin(g) History: The Example of Toni Morrison's *Beloved*." Andrews and McKay, pp. 37-66.

Sale, Maggie. "Call and Response as Critical Method: African-American Oral Traditions and *Beloved*." Solomon, pp. 177-88.

Sitter, Deborah Ayer. "The Making of a Man: Dialogic Meaning in *Beloved*." Solomon, pp. 189-204.

Smith, Valerie. "'Circling the Subject': History and Narrative in *Beloved*." *Toni Morrison: Critical Perspectives Past and Present*, edited by Henry Louis Gates Jr. and K. A. Appiah, Amistad, 1993, pp. 342-55.

Solomon, Barnara H., editor. *Critical Essays on Toni Morrison's* Beloved. G. K. Hall, 1998.

Yeates, Robert. "'The Unshriven Dead, Zombies on the Loose': African and Caribbean Religious Heritage in Toni Morrison's *Beloved*." MFS *Modern Fiction Studies*, vol.61, no. 3, 2015, pp. 515-37. *Project MUSE*, muse.jhu.edu/article/594738.

Wu, Yung-Hsing. "Doing Things with Ethics: Beloved, Sula, and the Reading of Judgment." *MFS: Modern Fiction Studies*, vol. 49, no. 4, 2003, pp. 780-805. *MLA International Bibliography*, doi: 10.1353/mfs.2003.0067.

Wyatt, Jean. "Giving Body to the Word: The Maternal Symbolic in Toni Morrison's *Beloved*." *PMLA*, vol. 108, no. 3, 1993, pp. 474-88.